ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２３５

[the public sphere](http://llc-research.jp/~archives/Papers/Duo%20Sunt/two%20powers%20principles%20rev10.pptx)**を、その起源である****Christianityと切り離して構築することは可能。**

20170818 rev.1 齋藤旬

**この所行ったlegitimate defenseやjust war theoryの説明が読者の誤解を招いた**。この関連で頻繁に行ったメールのやり取りの中で、二つのことを当会の前提条件として参加者に認めてもらわねばならないと私は思い始めた。

1. Christianity（キリスト教）とChristian Social Thought[[1]](#footnote-1)（キリスト教社会思想）は別物。[[2]](#footnote-2)　前者は宗教[[3]](#footnote-3)だが、後者は二つのsocial axioms（社会公理）：「共通善」「人間の尊厳」[[4]](#footnote-4)の上に構築されつつある社会思想。
2. 当LLC制度研究会の議論の土台はChristian Social ThoughtであってChristianity（キリスト教）ではない。議論は、キリスト教社会思想→the public sphere→partnership theoryと行い、キリスト教が議論の対象にならないようにする。[[5]](#footnote-5)

つまりひと言で言えば、「the public sphereを、その起源であるChristianityと切り離して構築することは可能」ということを前提にして当研究会の議論を進めていく。

**「宗教抜き」「神抜き」。**欧州、南北米大陸、アフリカ大陸の一部で優勢となってきているキリスト教民主主義（Christian Democracy）は、社会にthe public sphereを組み込むことが特徴[[6]](#footnote-6)だが、実はこの動きも頭にChristianと付いているものの「宗教抜き」「神抜き」で行われている。斯界の第一人者マルセル・ゴーシェの著書*La Religion dans la démocratie* (1998)が、2010年に和訳され[『民主主義と宗教』](https://www.amazon.co.jp/%E6%B0%91%E4%B8%BB%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E3%81%A8%E5%AE%97%E6%95%99-%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%82%BB%E3%83%AB-%E3%82%B4%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A7/dp/4901510797/ref=sr_1_1?ie=UTF8&qid=1503112437&sr=8-1&keywords=%E3%80%8E%E6%B0%91%E4%B8%BB%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E3%81%A8%E5%AE%97%E6%95%99%E3%80%8F)として出版されているが、この本の中にもキリスト教民主主義が「宗教抜き」「神抜き」であることが何度も述べられている。（下線付き赤字化は私が行った。）

11頁（訳者解説I）：

それにしても、なぜ宗教と政治は深くかかわるのか。ゴーシェの考えでは、それは人間の社会が自分自身を理解するときに、「他律」の回路を用いるからだ。政治が自分自身を正当化するとき、宗教という外部を要請すると言ってもよい。人間の社会は、元々はこうした他律社会であった。ところが、一神教的キリスト教は、「自律」への突破口を開いた。確かに、神を唯一絶対のものとし、それを現世に対して超越させることは、他律への志向をますます強めることであるように見えるかもしれない。だが、ゴーシェによれば、神が人間から隔絶するというまさにこの動きの中で、人間の世界が人間に委ねられる端緒が生まれている。かくして一神教的キリスト教は、「宗教からの脱出の宗教」（[*The Disenchantment of the World: A Political History of Religion*](http://press.princeton.edu/titles/6182.html) Marcel Gauchet, Translated by Oscar Burge

With a foreword by Charles Taylor、原書は*Le désenchantement du monde: Une histoire politique de la religion*）と位置づけられる。

103頁：

私達は、天なしで行う人間の政治を学んでいるところなのだ･･･天とともにでも、天の代わりにでも、天に逆らってでもなく。この経験は、戸惑いに満ちている。

159頁：

･･･「神なき宗教」に向かうことになるとは限らず･･･宗教は、神なき叡智の地へとやってきているので、この世でよき生を送ることが問題となっている。宗教が立てる目標は、神を引き合いに出さなくともよいものであって、当の宗教も、その点は暗黙のうちに認めている。

**キリスト教文化が残っている西洋においてすら「戸惑いに満ちている」のに**、日本において、即ち、元々キリスト教文化がほとんどなく社会において国家圏（state sphere）だけが優勢な日本において、あるいは、或る意味で既に「宗教抜き」「神抜き」の社会を構築したと言えなくもない日本において、the public sphere---その起源はキリスト教であり政教分離が進んだ現代において非国家圏となったthe public sphere---を構築しそれを社会に組み込むことが出来るのか？　つまり、日本に、キリスト教が起源であるthe public sphereを「キリスト教抜き」で構築し、partnership theoryを根付かせることが出来るのか？　途方も無い挑戦となるが、この難問に肯定的答えを見いだすこと、これをLLC制度研究会では行いたい。

今週は以上。来週も請うご期待。

1. CSTというacronymにはChristian Social ThoughtとCatholic Social Thoughtという二つの意味がある。この両者の考え方に大きな違いは無い。つまりChristian Social Thoughtは、その骨格作りが始まった19世紀半ば以降、CatholicとProtestantとが歩調を合わせて統一的に構築を進めている。Christian Social Thought の一部であるjust war theory作りにおいてもCatholicとProtestantは、同調しながら作業を進めている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 同様に、CatholicとCatholic Social Thoughtも別物。但しCatholic Social Teaching（カトリック社会教説）はCatholicを統率するVaticanが発行する内容の範囲に留まる。従って、CatholicとCatholic Social Teachingに齟齬はない、と最近まで言えた。2013年に教皇が現在のフランシスコ教皇に替わってから、シノドス（全世界司教会議）で過半数だが三分の二以上の賛成が得られなかった意見や動議を、教皇が発行する文献に肯定して載せるようになった。現在、CatholicとCatholic Social Teachingに齟齬はないとは言えない。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 宗教とはいっても、ユダヤ教やイスラム教の様な宗教法を持たないことがキリスト教の特徴。キリスト教では「神を愛し人を愛せ」だけが固定的に定まったruleであり、それ以上のことは公会議やシノドスをその都度開き合議制によって時代に合わせ柔軟に決めていく。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 実は、「共通善」「人間の尊厳」が何なのか未だ明確に定まっていない。discernし切れていない。各界でのdiscernの進展を今後は適宜紹介していく。更に言えば、もしかしたらこれら二つとは別の第三の社会公理も見つかるのかもしれない。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 当研究会の議論で、必要とされれば、キリスト教（に属す或る人）はコウコウ捉えていた／捉えているという話は今後も出るだろう。その場合、ある特定の人の主観的捉え方の紹介になってしまうのは避けられない。宗教とは、人々が共鳴した主観の集まりだからだ。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 例えば、ドイツのCDU（キリスト教民主主義政党）誕生経緯を扱った[*The Origins of Christian Democracy: Politics and Confession in Modern Germany*](https://www.amazon.co.jp/Origins-Christian-Democracy-Politics-Confession-ebook/dp/B00ZYLDZNY/ref=sr_1_1_twi_kin_2?ie=UTF8&qid=1503122667&sr=8-1&keywords=9780472118410)参照方。 [↑](#footnote-ref-6)